

インド哲学仏教学研究室

(インド哲学仏教学専修課程)

インド哲学仏教学専修課程に進学したら…

インド哲学仏教学研究室(以下、印哲研究室)では、西洋の思想と東洋の思想の双方を架橋してきたインド哲学や仏教思想を研究するために、原典に触れることを大切にしています。生や死という人生の根本的問題に対して、すでに解釈された表層的な意味を与えられて終わるのではなく、意味が誕生する原初の現場に立ち、みずからが解釈の主体であることを知るためです。原典は、おもにサンスクリット語、パーリ語、漢文、チベット語で書かれていて、演習形式の授業では、これらの読解の手ほどきをしています。このように言われると、しり込みしてしまう人もいますが、心配することはありません。初めから古典を読みこなせる人はいません。学部学生は初歩から順を追って、焦らずに学んでいけばよいのです。教員や先輩たちが皆さんを手助けしてくれます。概説書では窺うことのできない深淵な知の世界がここに 있습니다。直にインド思想や仏教を学び、現在に生きる叡智に触れたいと思ったなら、印哲研究室への進学を考えてみてください。

教員から2年生の皆さんへメッセージ

現在、インド哲学仏教学研究室には、四人の教員がおります。各教員から皆さんへのメッセージをご紹介します。

下田 正弘(教授):初期仏教・インド大乘経典

仏教の原典にむかいあうことによって、これまでの自分自身が照らしなおされ、同時に思索をすることのよるこびに触れる、そんな貴重な時間を学生たちとともにしています。学び求めて与えられること、この悦しみは、ほかの手段では手にすることのできない財産。こんな世界が東大のなかに、身近にあるのです。

養輪 顕量(教授):日本仏教

仏教学としての日本仏教研究の特徴は、古へからの仏教学の伝統を踏まえて日本の仏教を研究する立ち位置にあります。日本の仏教の伝統には「行」と「学」という二つの視点が存在します。仏教の学びは、この二つの視点を忘れずに行うと、何を解決しようとしていたのか、現在との関連も見えてきます。伝統的な教理や思想に対する研究と同様に、修行や実践道に対する謙虚な眼差しも必要です。

高橋 晃一(准教授):インド仏教哲学文献(唯識思想)

仏教文献の読解を通じてあらためて気づかされることは少なくありません。インド哲学仏教学研究室は、仏教思想家たちの問題意識に直に触れる経験ができる貴重な場所です。仏教は宗教の教理だという固定観念を離れ、サンスクリット原典として仏教文献を読み解く醍醐味を味わってみてはいかがでしょうか。

加藤 隆宏(准教授):インド哲学(「六派哲学」)

日本のインド哲学は、6世紀頃から蓄積されてきた仏教学の伝統と明治期にヨーロッパから持ち込まれた厳密な原典批判に基づくインド学とが融合した、世界的にみても希有な学問分野です。日本の研究者たちは、インド・日本・ヨーロッパという三つの視点に立って総合的な研究を行うことで、この分野をリードしてきました。近年では、インド学・サンスクリット文献学分野の研究規模縮小が世界的に起こりつつありますが、インドにおいてはその傾向が特に著しく、これまで伝統的な教育方法によって脈々と継承されてきた知識が失われようとしています。そうした失われつつある知識の価値を国際的なレベルで再確認し、人類共通の知的遺産ともいべきインドの伝承知を次世代に伝えていくことも、私たちの重要な仕事の一つです。

先輩からの一言

印哲研究室には、2020年4月の時点で11名の学生が在籍しています。そのほかに大学院博士課程の学生15名と、修士課程の学生6名も、一緒に活動しています。大学院生には海外からの留学生も多くいて、国際色豊かな研究室になっています。

現在、学部4年に在籍中の先輩たちから、研究室の紹介をしてもらいました。

学部4年生 A 君

インド哲学仏教学研究室では、語学と思想の2つを学んでいます。語学については特に、仏教やインドの哲学において代表的な言語である、サンスクリット語の原典を少しずつ読みます。また、読解を通じて思想に触れるだけでなく、様々な思想の関連性や歴史も学ぶことができます。例えば、巷で「ブッダによれば」として語られる内容も、何らかの文献に基づいています。それらの文献の歴史性に注目すると、より広い視点から思想と向き合えるように思います。先生方の指導は非常に熱心です。

学部4年生 B 君

サンスクリット等の古典語、インド文化思想の知識、先学の研究……、いまだ辞書を引き引き首を傾げる自分には、いつになればテキストの内容を云々出来るのか、目眩のするような思いです。しかし態々印哲に来るような求道心溢れる同期、親切な先輩方や専門の先生方に啓発されつつ、過去からの積み重ねを踏まえた見晴らしの良い、そして哲学や科学の洗礼を受けた現代の立場から、いつか仏教の哲学を理解していけるかという期待を抱きつつ、日々格闘しています。

学部 4 年生 C 君

「思慮ある人は、奮い立ち、努めはげみ、自制・克己によって、激流も押し流すことのできない島をつくれ。」(『ダンマパダ』)

私が印哲に進学する決め手になった言葉を引用したが、初めてこの言葉に出会った時あまりの衝撃にその場で仏陀に土下座しそうになった。なんと素朴で力強い言葉だろうか。また、印哲では三蔵を梵蔵漢巴の四言語から比較して読むことになるが、その学術的精緻さには日々脱帽の思いである。

卒業後の進路

専修課程卒業後は、大学院に進学し、研究職を目指す学生が多いですが、一般企業や役所に就職する学生も少なくありません。出版社に就職し、いまでも研究室の教員や大学院生と一緒に活動している人もいます。また、著名な作家も印哲研究室の同窓生に名を連ねており、大先輩では、ひろさちやさん、最近では、芥川賞を受賞した石井遊佳さんが印哲研究室の卒業生です。

さいごに

今年是个別にお話しする機会がなく、学部 2 年生の皆さんの疑問に答え切れてはいないかもしれません。もし、質問があれば、研究室あてにメールで質問してください。アドレスは以下の通りです。

intetsu@l.u-tokyo.ac.jp

また、ウェブサイトも公開しておりますので、そちらも参考にしてください。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/intetsu/index.html>

学生にとって、進路選択はとても重要なことですので、自分が何をやりたいのか、よく考えて進学先を決めてください。この研究室紹介が、皆さんの進路選択の一助となれば、幸いです。(終)